

[要旨] ウズベク語 (チュルク諸語南東語群) の先行研究では、=chi は、「疑問」「強調」「促し・強い命令」「脅し」を表すとされている。しかし、これらの機能を=chi 自体が担うとする分析には再考の余地がある。本発表では、テキスト調査・インフォーマント調査の結果をもとに、=chi の機能を明らかにすることを目的とし、次の点を明らかにした。=chi は、前提との関係を標示するという機能を持ち、次の三つの用法 (1. 対比疑問、2. 主題標示、3. 促し) を持つ。「1. 対比疑問」の場合、前提と対照的な要素に =chi が付き、対照的な要素以外は =chi が含まれる文には現れない。文末イントネーションは下降調を取る。「2. 主題標示」の場合、前提を受け継いだ要素あるいは前提中の要素に=chi が付き、それを談話に導入する。「3. 促し」の場合、話し手は、前提に沿って、=chi が付く文によって表される行為を命じている。文末イントネーションは上昇調を取る。

## 0. はじめに

本発表では、ウズベク語 (チュルク諸語南東語群) の=chi が持つ機能について議論する。先行研究では、=chi は、「疑問」「強調」「促し・強い命令」「脅し」を表すとされている。しかし、発表者は =chi 自体がこれらの機能を担うとする分析には再考の余地があると考え。そこで、本発表では、テキスト調査で用例を収集し、=chi の持つ機能を再検討し仮説を立て、その仮説を検証するためにインフォーマント調査を行うことで、=chi の機能を明らかにする。

本発表の構成は、次の通りである。1 節で先行研究を概観し、2 節で問題提起を行う。3 節で調査の結果を示し、4 節で考察を行い、結論を述べる。なお、本発表における例文番号・グロス・日本語訳・下線などの文字飾りはすべて発表者によるものであり、例文中の=chi には =CHI とグロスを付す。

## 1. 先行研究

本節では、=chi が持つとされる四つの機能について概観する。先行研究では、=chi は、①「疑問」(Kononov 1960: 334, Sjoberg 1963: 67, Abdurahmonov et al. 1975: 576, Bodrogligeti 2003: 1017)、②「強調」(Abdurahmonov et al. 1975: 576)、③「促し・強い命令」(Kononov 1960: 334, Abdurahmonov et al. 1975: 576, Bodrogligeti 2003: 1026-27)、④「脅し」(Kononov 1960: 334, Abdurahmonov et al. 1975: 576, Bodrogligeti 2003:

(1) *Endi orqa-ga yo'l yo'q. Oldin-ga=chi?*

now back-DAT way no front-DAT=CHI

「もう後ろには道がない。前には？」

(Abdurahmonov et al. 1975: 576)

(2) *Azimjon=chi, sen-ga amnavachcha bo'l-a=di.*

PN=CHI 2SG-DAT cousin be-NPST=3

「アジムジョンは、君に対してのいとこになる。」

(Abdurahmonov et al. 1975: 576)

1026-27) を表すとされている。

①「疑問」を表すとされる例を (1) に挙げる。(1) では、*orqa-ga*「後ろに」に対して *oldin-ga*「前に」に =chi が付され、前文と対照的な要素に =chi が付いて文が終わっているように見える。この点に関して、先行研究では特に言及がない。

Abdurahmonov et al. (1975: 576) では、②「強調」を表す例として、(2) を挙げている。

しかし、上記の一文だけでは、=chi がどのように用いられているのか判然としない。発表者は、(2) の後に付されている、文学作品の作者名 (A. Muhtor) をもとに、(2) が *Chinor*『プラタナス』(Olim et al. 2014: 46) という作品に収録されていることを探し出した。(2) は、次の発話に続いている：“*Nega*

*qidiradi? Azimjon kim?*”「なぜ探すのですか？アジムジョンとは誰でしょうか？」つまり、(2) は、前文を受けて、アジムジョンが誰であることを説明している。なお、Abdurahmonov et al. (1975: 576) では、=*chi* が含まれる文とその前文との関係に関して、特に指摘はない。

次に、③「促し・強い命令」を表すとされる例を挙げる。「促し」(3) では命令形のあとに、「強い命令」((4), (5)) では二人称条件形のあとに、それぞれ =*chi* が付されるという (Abdurahmonov et al. 1975: 576, Bodrogligeti 2003: 1026-27)。

(3) *Xo'sh, endi, ayt-ing=chi, ko'cha-dan nega bezovta kir-di-ngiz?*

well now say-IMP.2PL=CHI street-ABL why disturbed enter-PAST-2PL

「さあ、今話してください、通りからなぜ (そんなに) 混乱した状態に入ってきたのですか？」

(Bodrogligeti 2003: 1026-27)

(4) *Yoz-sa-ngiz=chi!*

write-COND-2PL=CHI

「書いてください！」 (Kononov 1960: 334)

(5) *tez yur-sa-ng=chi.*

quickly walk-COND-2SG=CHI

「速く歩いてください」

(Abdurahmonov et al. 1975: 576)

ただし、二人称条件形は (6) のように、=*chi* が付かなくとも二人称条件形のみで命令を表せる。

(6) *Men-ga biroz suv ol-ib kel-sa-ngiz.*

1SG-DAT some water take-CVB.SEQ come-COND-2PL

「私に少し水を持ってきて頂きたいです。」 (中嶋 2015: 81)

最後に、④「脅し」を表すとされる例 ((7), (8)) を挙げる。(7) では、副動詞 *kel-ib* 「来て」と、補助動詞 *ko'r-* 「見る」の命令形の組み合わせによって、「来るな (もし来るならあなたは不利益を被る)」という反語的な意味が表されている。(8) では、命令形のみで「それに触れるな」という反語的な意味が表されている (この文が反語的な意味を持つことを表すために、Bodrogligeti 2003 による英訳を挙げる)。

(7) *kel-ib ko'r=chi, yon-im-ga.*

come-CVB.SEQ see.IMP.2SG=CHI side-1SG.POSS-DAT

「来てみろ、私の側に」 (Abdurahmonov et al. 1975: 576)

(8) *Ko'r-a=miz, qani qo'l-ing-ni tegiz=chi, ur-ib sindir-a=man.*

see-NPST=1PL where hand-2SG.POSS-ACC make.touch.IMP.2SG=CHI hit-CVB.SEQ break-NPST=1SG

‘We’ll see! Just try to touch it and I will break your hand.’ (Bodrogligeti 2003: 1026-27)

風間 (2018: 8-9) によれば、ウズベク語では、補助動詞 *ko'r-* 「見る」の命令形 (9) を用いても、命令形のみ (10) でも、反語命令 (本節でいう「脅し」) を表すという。

(9) *Bu bola-ni masxara qil-ib ko'r, (kechir-ma-y=man!)*

this child-ACC ridicule do-CVB.SEQ see.IMP.2SG allow-NEG-NPST=1SG

「この子をいじめてみろ (、許さないぞ!)」 (風間 2018: 8)

(10) *Alda!, alda!*

deceive.IMP.2SG deceive.IMP.2SG

「うそをつけ！」 (風間 2018: 9)

つまり、=*chi* を用いずとも、命令形だけで「脅し」を表すことが可能であると言える。

## 2. 問題提起

前節では、先行研究による=*chi*の記述を概観した。その記述によれば、=*chi*は①「疑問」、②「強調」、③「促し・強い命令」、④「脅し」を表すとされている。しかし、これらの機能を=*chi*自体が担うとする分析には再考の余地がある。例えば、①「疑問」は、疑問詞あるいは小詞=*mi*で基本的に表される。

(11) *Ular-ga nima-ni taklif qil-di-ngiz?*

3PL-DAT what-ACC suggestion do-PAST-2PL

「あなたは彼らに何を提案しましたか」

(中嶋 2015: 36)

(12) *Siz kel-a=siz=mi?*

2PL come-NPST=2PL=Q

「あなたは来ますか？」

(Bodrogligeti 2003: 1015)

(11)では疑問詞 *nima*「何」、(12)では小詞=*mi*が用いられている。これらは基本的な疑問文であると考えられるが、先行研究では、=*chi*による疑問文とこれらの疑問文との違いについては言及がない。③「促し」と④「脅し」でも、=*chi*そのものではなく、命令を表す形式自体が「促し」あるいは「脅し」を表すと解釈できる(「促し」は(3)~(6)、「脅し」は(7)~(10)を参照されたい)。

先行研究の記述を概観するに、先行研究では、先行文脈や発話場面を考慮せずに、当該の文のみから機能を判断しているために、=*chi*の機能を十分に記述できていないのだと考えられる。そこで、本発表では、先行文脈や発話場面を考慮に入れながら、調査・考察を行い、=*chi*の機能を明らかにする。

## 3. 調査

本節で調査の概要を述べてから、各小節で=*chi*について分析する。

まず、テキスト調査を行う。発表者作成のコーパスと O‘zbek tilining ta’lim korpusi「ウズベク語教育用コーパス」(<http://uzschoolcorpara.uz>; 以降 OTTK と略して呼ぶ)を用いて=*chi*の例を抽出する。

発表者作成のコーパスでは、採録されたテキスト全文にアクセスできる。そのため、抽出された用例の先行文脈や発話場面を考慮に入れて分析を行うことが可能である。コーパスは、インターネットニュースサイト Ozodlik radiosi (<http://www.ozodlik.org>)からの記事(2014年1月から8月、2015年7月から11月、2016年3月から4月にwebに掲載された記事)と、小説 *Besh qiz va bir yigit*『5人の女の子と1人の若者』と、短編集 *Laude-Cirtautas* (1980)から成る(単語数 約3万4千、文字数 約324万)。正規表現を用いてテキストエディタの検索機能で=*chi*の用例を抽出したところ、9例抽出することができた。

筆者作成のコーパスでは例が少ないため、OTTKでさらに用例を集める。検索窓に“-*chi*”と入力し検索したところ、5802例が得られた。OTTKでは、各用例の前後文脈や出典元などの情報が参照できる。ただし、どのような基準で用例が並べられているのかは不明であり、5802例の中には小詞=*chi*を含まない用例もカウントされている。本発表では、これら5802例のうち、小詞=*chi*を含み、かつ先行文脈が参照可能な用例100例までを分析対象とする。

発表者はテキスト調査の結果、=*chi*を含む発話文が、先行文脈と何らかの関連がなければ、=*chi*が使えないと考えた。この仮説を裏付けるために、インフォーマントへの聞き取り調査を行う。さらに、テキスト調査で「疑問」「強い命令・促し」「脅し」での=*chi*が文末に位置することが判明した。それぞれの用法で文末のイントネーションが異なると推察される。それを検証するために、読み上げ調査も行った。インフォーマントは1989年生まれ、タシケント市生まれの男性1名である。

### 3.1. テキスト調査

本節では、先行研究に則って、①「疑問」、②「強調」、③「促し・強い命令」、④「脅し」の順に例を挙げる。なお、コーパスには、これ以外の意味を表す用例はない。

まず、①「疑問」(109 例中 42 例) について述べる。この場合、1 節で挙げた、名詞に=*chi* が付く例のみならず (cf. (1)), 条件文の前件 (13)、副詞 (14) に=*chi* が付く例も収集できた。

- (13) — *Bratan, endi biz bilan bir karta o'yna-y=siz, yutqaz-sa-ngiz, bizlar*  
 brother now 1PL with one card play-NPST=2PL lose-COND-2PL 1PL  
*qol-ib, qiz-lar bilan maishat qil-a=miz, ...— de-di-ø ochiqchasiga.*  
 remain-CVB.SEQ girl-PL with partying do-NPST=1PL say-PAST-3SG honestly  
 『兄弟、今あなたは私たちと一度トランプをやる、あなたが負ければ私たちが残って、女の子たちとパーティーする (中略)』と率直に言った。」

— *Karta o'yna-ma-sa-m=chi?*

card play-NEG-COND-1SG=CHI

「トランプをしなければ (どうなりますか)?」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 3919)

- (14) *Lekin, shunisi bor=ki, uzoq asr-lar davom-i-da bu aloqa+ta'sir-lar juda*  
 but that existent=CMPL distant century-PL continuation-3.POSS-LOC this relation+effect-PL very  
*sekinlik bilan, kichik doira-lar-da, chegara old-i hudud-lar-i-da ro'y*  
 slow with little circle-PL-LOC border front-3.POSS territory-PL-3.POSS-LOC surface  
*ber-ar=di-ø. ... Hozir=chi?*  
 give-PTCP.FUT=PAST-3 now=CHI

「しかし、次のことがある。遠い昔には、これらの相互作用は、非常に遅く、小さな範囲で、辺境で、生じていた。(中略) 今は (どうだろうか)?」 (Vatan tuyg'usi)

「疑問」の文では、先行文脈のある部分に対して対照的な要素に=*chi* が付き、それ以外の要素は=*chi* が含まれる文に現れないという特徴がある。例えば、上記に挙げた例の下線部を参照されたい。(13) では、先行する発話の *bir karta o'yna-y=siz* 「あなたは一度トランプをやる」という部分に対して=*chi* が含まれる文が発話され、(14) では、先行する発話の *uzoq asr-lar davom-i-da* 「遠い昔には」という部分に対して=*chi* が含まれる文が発話されている。

次に、②「強調」(109 例中 12 例) について述べる。(15) は、花に水を注げば蝶が来ると知って、家に帰って花に水を注ごうとした時の主人公の発話である。

- (15) *Gul-lar-ga suv quy-a=man. Innaykeyin=chi, gul-lar-im-ga kapalak kel-a=di.*  
 flower-PL-DAT water pour-NPST=1SG after.that=CHI flower-PL-1SG.POSS-DAT butterfly come-NPST=3

「私は花に水を注ぎます。その後には、私の花に蝶が来ます。」 (Kapalak: 42)

(15) では、=*chi* が、先行文脈「花に水を注ぎます」を受け継いだ要素 *Innaykeyin* 「その後」を談話に導入し、その要素の後に、その要素に関する情報 (*gul-lar-im-ga kapalak kel-a=di* 「私の花に蝶が来ます」) が述べられている。なお、コーパス中の「強調」の用例では、全て、先行文脈を受け継いだ要素か先行文脈ですでに表れている要素に=*chi* が付されている。

次に、③「促し」(109 例中 54 例) の例を挙げる。(16) は二人称命令に=*chi* が付されている例である。

- (16) — *Ha, manavi surat-ni ko'r-ib, yoshlig-im es-im-ga tush-ib*  
 yes that picture-ACC see-CVB.SEQ young.age-1SG.POSS memory-1SG.POSS-DAT fall-CVB.SEQ  
*ket-di-ø, qiz-im. Men ham mashina hayda-b paxta ter-gan=man.*

leave-PAST-3SG girl-1SG.POSS 1SG also car drive-CVB.SEQ cotton gather-PRF=1SG

「そう、この写真を見て、自分の若い時を思い出してしまった、女子よ。私も車を運転して綿を集めた。」

— *Qani, ko'rsat-ing=chi.*

INTJ show-IMP.2PL=CHI

「どれ、見せてください。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit: 4972)

(16) では、おじさんが新聞を読みながら、その新聞に掲載されている写真について話しており、ある女の子がその写真を見せるようお願いしている。つまり、女の子はおじさんの意に沿って =chi を含む文を発話している。

(17)は、一人称複数命令に=chi が付されている例である。

(17) — *Rais bobo, bir taklif bor. — Xo'sh, xo'sh, eshit-aylik=chi?!'*

leader grandfather one proposal existent well well listen-IMP.1PL=CHI

「会長さん、一つ提案があります。」 「さあ、さあ、聞きましょう?!」

(BeshQiz\_va\_BirYigit: 1787)

(17) では、会長たちが、提案があるという聞き手の意向に沿って、その提案を聞こうとしている。

最後に、④「脅し」(109 例中 1 例) について述べる。(18) は、ある人が「妻を強く束縛すれば、妻はあなたが無知のままであることを期待する」と言ったあとの、ノルコジ氏の発話である。なお、この用例中のブルカは女性を束縛するもののメタファーであると考えられる。

(18) *Mulla Norqo'zi bu odam-ning oddiy haqiqat-ni angla-maslig-i-dan koyi-di-ø:*

mulla PN this person-GEN nomal fact-ACC understand-VN.NEG-3.POSS-ABL scold-PAST-3

「ノルコジ氏はこの人が通常の実を理解していないことを叱った:」

— *Behuda gap! Mana mening xotin-im, nima ekan-i-ni o'z-im*

useless talk exactly 1SG.GEN wife-1SG.POSS what COP.PTCP-3.POSS-ACC own-1SG.POSS

*bil-a=man. Paranjisi-ni tashla-b ikki kun ko'cha-da yur-sin=chi!*

know-NPST=1SG burka-3.POSS-ACC throw-CVB.SEQ two day street-LOC walk-IMP.3=CHI

『意味のない話だ！ほら、私の妻だ、私は彼女が何であるか知っている。(私の妻に)ブルカを外して二日間通りで歩かせてみろ！』 (Mayiz yemagan xotin)

(18) の =chi が含まれた文は、「妻を束縛すべきではない＝ブルカを外すべきである」という聞き手の意向に沿った発言となつてはいるが、実際は「自分の妻にブルカなしで通りで歩かせる (=妻を束縛しない) と、ろくなことが起きない」と言外の意味を表している。

### 3.2. インフォーマント調査

発表者は、テキスト調査の結果、当該の発話文に先行文脈との関連がなければ、=chi が使えないと仮説を立てた。例えば、①「疑問」では、先行文脈との対照的な要素に、②「強調」では、先行文脈から受け継いだ主題に、それぞれ=chi が付いていた。③「促し」と④「脅し」でも、聞き手の発言を受けて聞き手の意向に沿うと話し手が想定した命令を表す文に=chi が付されている。

そこで、「先行文脈との関連がない状況では、=chi は使えない」という仮説を検証するために、先行文脈がないような状況 (下記 a. と b.) で =chi を発することができるかどうかインフォーマントに聞き

取り調査を行った (なお、今回の調査では、先行文脈との関連がない状況を作りやすい命令文に関してのみ調査を行った) : a. 先生が自分の部屋に来た学生に対して、「座ってください」というときに=*chi*は使えるか、b. 料理本での指示、例えば「塩を入れてください」に=*chi*は使えるか。

(19) *Qani, o'tir-ing=chi.*

INTJ sit-IMP.2PL

「さあ、座ってください。」

a. では、(19) のように=*chi* を使えるという。一方、b. では、=*chi* は使えないという回答を得た。これは、=*chi* が含まれる文と前提とがどのような関係にあるかが関わりと考えられる。Lambreht (1994: 52) によれば、前提は次のように定義される: “The set of

propositions lexicographically evoked in a sentence which the speaker assumes the hearer already knows or is ready to take for granted at the time the sentence is uttered.” 例えば、a. では、話し手は聞き手と「部屋に来たら座って話す」という共通認識を持つと想定している。これが前提であり、その前提に沿った発話が行われている。他方、b. では、話し手は、聞き手が当該の料理の作り方について知識がないことを想定している。したがって、=*chi* は、前提に沿った発話を行う場合には用いられるが、そうでない場合には用いられないと言える。以上より、=*chi* は、前提との関係を標示している、と言える。

読み上げ調査では、文末に=*chi* が位置する「疑問」「強い命令・促し」「脅し」のイントネーションについて分析を行った。発表者作成のコーパス収録済みの *Besh qiz va bir yigit*『5人の女の子と1人の若者』という小説からの用例7例 (「疑問」4例、「促し」3例) と、OTTKからの「脅し」の例1例、それぞれを前後文脈と共に音読するようインフォーマントへ指示をした。その結果、「疑問」の文は全て下降調を取り、他方、「促し」「脅し」の文は全て上昇調を取ることが明らかとなった。

#### 4. 考察・結論

3.2節のインフォーマント調査では、「=*chi* は、前提との関係を標示している」ということを明らかにした。この結果をもとに、テキスト調査の結果を①「疑問」、②「強調」、③「促し・強い命令」、④「脅し」の順に再整理する。

まず、①「疑問」について述べる。この場合の=*chi* を含む文には、前提と対照的な要素に=*chi* が付き、対照的な要素以外は=*chi* が含まれる文に現れないという特徴がある。コーパスから得られた「疑問」の全ての例、および先行研究で「疑問」とされている用例 (1) にも、その特徴が見られる。一方、2節の問題提起でも指摘したように、疑問の小詞=*mi* は、前提と対照的な要素に付くことも、その要素だけが文中に現れることもない (cf. (12))。したがって、本発表では、=*chi* は、「疑問」を表すのではなく、「対比疑問」を表すと結論付ける。なお、=*chi* が付された文の文末イントネーションは下降調である。

②「強調」の場合、=*chi* が前提を受け継いだ要素あるいは前提中の要素を談話に導入し、その後にはその要素に関する情報が述べられている。これは、コーパスから得られた「強調」の全ての例、および先行研究で「強調」とされている用例 (2) にも、同様の特徴が見られる。

以上の観察より、=*chi* が付される要素は、主題 (topic) であると言える。相原 (2015: 114) によれば、「主題は、解説 (comment) が加えられる対象であり、ある文がある事物についての聞き手の知識を増やすような情報を表していると解釈できる場合、その事物やそれを指し示す言語表現はその文の主題 (題目、話題とも) と呼ばれる」と定義される。今回の調査では、「強調」における=*chi* は主題に付いており、その後には主題に関する解説 (comment) が述べられている。したがって、本発表では、=*chi* は、「強調」を表すのではなく、「主題標示」として機能していると結論付ける。

③「促し・強い命令」の場合、話し手は、文脈あるいは発話場面から推察される聞き手の意向=前提

に沿って、=chi が付く文によって表される行為を命じている。この場合は、聞き手の意向と話し手の意向が一致している。④「脅し」の場合も、表面上は、前提に沿って行為を促しているように見えるが、実際には、その行為は話し手の意向には沿っておらず、その行為をしないように促す、という語用論的含意を表している (cf. (18))。したがって、本発表では、「促し・強い命令」「脅し」の =chi は「促し」として機能していると結論付ける。なお、コーパスから得られた「促し・強い命令」「脅し」の全ての例にも、上記の特徴が見られる (先行研究に挙げられた用例 ((3)~(5), (7), (8)) には、先行文脈がないため、ここでは取り扱うことができない)。なお、=chi が付された文の文末イントネーションは上昇調である。

最後に、本発表での議論と結論をまとめる。本発表では、=chi は、前提との関係を標示するという機能を持ち、次の三つの用法 (1. 対比疑問、2. 主題標示、3. 促し) を持つことを明らかにした。「1. 対比疑問」の場合、前提と対照的な要素に =chi が付き、対照的な要素以外は =chi が含まれる文には現れない。文末イントネーションは下降調を取る。「2. 主題標示」の場合、前提を受け継いだ要素あるいは前提中の要素に =chi が付き、それを談話に導入する。「3. 促し」の場合、話し手は、前提に沿って、=chi が付く文によって表される行為を命じている。文末イントネーションは上昇調を取る。

表 1: ウズベク語における =chi の用法

	先行研究での分類	前提との関係	ホスト	統語的特徴	文末イントネーション
対比疑問	疑問	対照的	対照的要素	文末、対照的要素のみ現れる	下降調
主題標示	強調	前提に沿う	主題要素	文末以外	—
促し	促し・強い命令、脅し	前提に沿う	命令を表す文	文末	上昇調

#### 略号一覧 (Leipzig Glossing Rules に記載されていないもののみ掲載)

ADJLZ (adjectivizer) 形容詞化/ CMPL (complementizer) 補文標識/ COMP (comparative) 比較級/ INTJ (interjection) 間投詞/ PN (personal name) 人名/ SEQ (sequential) 継起

#### 参考文献

Abdurahmonov, G'. A., Sh. Sh. Shoabdurahmonov, and A. P. Hojiyev (1975) *O'zbek tili grammatikasi I-tom Morfologiya*. [ウズベク語文法 第1巻 形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti. / 相原まり子 (2016) 「主題」 斎藤純男・田口善久・西村義樹編『明解言語学辞典』114-115. 東京: 三省堂. / Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa. / 風間伸次郎 (2018) 「アルタイ型言語における命令形の反語用法・条件用法について」 寺村政男編『言語の研究』1-19. 東京: 『水門 (みなと) 一言葉と歴史』編集部. / Kononov, Andrej N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka*. [現代標準ウズベク語文法] Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo akademii nauk SSSR. / Lambrecht, Knud. (1994). *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press. / 中嶋善輝 (2015) 『簡明ウズベク語文法』大阪: 大阪大学出版会. / Sjoberg, Andrée F. (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Bloomington: Indiana University.

#### 調査資料

Beknazarov, O'roz va Ismoil Yuldashev (2007) *Besh qiz va Bir yigit*. [5人の女の子と1人の青年] Toshkent: Cho'lpon nomidagi nashriyot-matbaa ijodiy uyi. / Laude-Cirtautas, Ilse. (1980) *Chrestomathy of Modern Literary Uzbek*. Wiesbaden: Harrassowitz. / *Ozodlik radiosi* (<http://www.ozodlik.org>) [最終閲覧日: 2022/5/12] / Olim, Sultonmurod, Sunnat Ahmedov and Rahmon Qo'chqorov. (2014) *Adabiyot Ikkinchi Qism. Umumiy o'rta ta'lim maktablarining 8-sinf uchun darslik-majmua*. [文学 第二巻 8年生向け教科書] Toshkent: G'afur G'ulom nomidagi nashriyot-matbaa ijodiy uyi. / O'zbek tilining ta'lim korpusi「ウズベク語教育用コーパス」(<http://uzschoolcorpara.uz>) [最終閲覧日: 2022/5/12]